
嘘ばかりうまくなる (BLEACH)

南条武都

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

嘘ばかりつまくなる（BLEACH）

【Z-ONE】

Z4933F

【作者名】

南条武都

【あらすじ】

『揺れる心は真実を覆い隠す』ある日突然、海燕からデータに誘われたルキア。戸惑いながらも嬉しい気持ちで当田を迎えるが……。（自サイト掲載）

「朽木！」

後ろから声をかけられて振り返つたら、廊下の先から、足音荒く海燕がやってくるところだった。

「海燕殿」

慌てて戻ると、いちいち堅くなるなつて、と言しながら、海燕はルキアの顔を覗き込んできた。

「朽木お前、明日暇か？」

「は？」

きょとんとして問い返す。海燕はじれたようにガガッ、とルキアの頭を掴み、

「明日暇かつて聞いてんだよー。ちやつちやと答えろー。」

「わ、は、はい！ 暇です！」

ぶんぶん振り回されそうになつたので、ルキアは声を張り上げた。海燕はよし、と笑う。

「じゃ、明日俺に付き合え」

「は……」

「にひぶいなお前。デートしきつてんだ」

「……は、はいっ！？」

今度こそ予想外の言葉に、つい素つ頓狂な声を上げてしまつ。しかし海燕はそんな事など気にもかけず、

「明日の暁、三芳みよしで待ち合わせな。遅れてくんないよ

手を振つて、さつさと立ち去つてしまつ。取り残されたルキアは、しばし呆然と立ち尽くした。

（な……何だ、今のは？ 海燕殿は、何を、言つて）

デート。

言葉が頭の中でわんわん響く。ルキアはぽ、と赤くなり、まさか

そんな海燕殿が私なんかと、と汗をかき、しばらぐの間、廊下で一

人百面相をしてしまつた。

次の日。緊張しながら「そばどじゅる・三芳」の暖簾をくぐると、そこにはもう海燕が待つていた。

「朽木、おせえ！ おじりせゐるぞー！」

「す、すみません」

正確な時間を告げなかつたのは海燕なのだから、遅れるも何も無いのだが、ルキアは肩を小さくして謝つた。海燕の向かいの席に座ると、さつと品書きが差し出される。

「飯まだだる。俺はもう頬んだから、お前も頬みな」

「は、はい。えつと……かけそばをお願いします」

「そんだけでいいのか？ 腹減るぞ」

「いえ、大丈夫です」

「遠慮すんな、本当におじりせやしねえよ。……親父！ かけそばとぜんざい、追加だ」

「あ……」

ルキアは赤くなつた。甘いものは好きだが、それをことさら口にした事は無かつた。海燕がごく自然に甘味を頬んでくれたのは、ルキアが好むと知つてゐるからだろう。

(この人は、本当に良く人を見ている)

海燕は大雑把なように見えて、実は誰よりも気遣いがうまい。自分には出来ないその心遣いが、すごいなと思つ。尊敬できる、と思う。

「何だよ。俺の顔に何かついてるか？」

「あつ、いえ！ も、申し訳ありません」

ついじつと見つめてしまつたので、不思議そうな顔をされてしまふ。ルキアが俯くと、海燕は変な奴、と肩をすくめた。

「さて、腹も一杯になつたところで……おい、朽木。こつちだ」

「え？ わつ……」

三芳を出たところで、海燕は不意にルキアの手を取つて、そのまま
まづかずか歩き始めた。

「か、海燕殿？ どちらへ行かれるのですか？！」

「人ごみを押しのけるようにして進んでいく海燕の背中に問いかけるも、周囲が騒がしくてルキアの声が聞こえていらないらしい、海燕は先を急ぐだけだ。

その大きな背中と、手首を掴む海燕の手の、がっしりした感触に、鼓動が激しくなる。

海燕は年の頃でいえばたぶん、義兄の白哉と同じ頃だろう。

しかし、これまでずっと見つめ続けてきた白哉の、全てを拒むような背中とは違い、海燕の背中は大きく、頼もしかった。先に立て歩きながら、こちらの手をしつかり掴んで離さない、その力強さが、心強かつた。

その強さゆえに、心が許せる人だと思う。

これほど弱く、力の無い自分を、この人なら認めてくれるのではと思つ。その背中にすがりついて、何もかも吐き出してしまいたい、と思つてしまつ。

「か……」

名を呼びたい。そう思い、口を開きかけたとき、唐突に海燕は足を止めた。いきなりだったので、

「うぶつ！」

勢いのまま海燕の背中にどん、とぶつかつてしまつ。

「おい、大丈夫か？ 着いたぞ」

くい、トルキアの頭を押して、海燕は指で示す。見上げたその店は、呉服屋だった。敷居をまたいで中に入ると、店子が海燕を見て愛想よく笑つた。

「いらっしゃいませ、志波様。やつとお心が決まりましたの？」

「あら。今日は可愛らしいお嬢さんを連れてらつしゃるのね。まさか、浮氣？」

「えつ」

「馬鹿言つてんじやねえよ、ンなわきやねえだろ。いいから、こないだの奴、出してくれよ」

ぎょっとして声を上げるルキアと対照的に、海燕は笑つて軽く流した。店子は一度奥に引っ込むと、両手に反物を持って戻つてくる。上がりがまちに腰を下ろした海燕は、ルキアにも座るよひに示しながら、

「朽木、お前の意見を聞かせてくれよ。これ、どっちが都に似合つと思う?」

屈託無く尋ねた。

「……え

不意に出てきた名前に、ルキアの動きが止まる。

「いや、今度あいつの誕生日でな。一つ着物でも仕立ててやるひつかと思つてんだが、どっちが良いか決まらねえんだ」

海燕はルキアの様子に気づかないまま、照れくさそうに頭をかく。「で、こつこつのはやつぱ、女に聞いた方が良いかと思つてよ。清音の奴に聞いても、どうせ適當な事しかいわねえだろうが、朽木なら目が確かだらうしな。な、どっちが良いと思つよ

と、反物を示して、問いかけてくる。

店子が広げた反物は、片方は紺に牡丹の花が咲き乱れ、片方は白地に桔梗がつつましく花開いていた。どちらも、目に痛いほど鮮やかで、美しくて、そのほかのものが震んで見えた。

ルキアは目を瞬いた。ぐ、と着物の裾をきつく握り締め、しかし次の瞬間にはだらりと脱力し、ふ、と笑う。

「そう……ですね。都殿には、そちらの紺のものが、似合つと思いまます。都殿は肌が白いから、きっとその美しさが際立つでしょう」「やうか! じゃ、こいつに決めた

海燕はぱん、と膝を叩き、上機嫌で店子に言った。

「今度都を連れてくるから、とびっきり上等な着物を頼むぜ」「はい、畏まりました。では、こちらをお取り置きしておきますね。よろしければ、小物もご一緒にいかがですか?」

す、と小物の類が並んだ盆を差し出され、海燕は覗き込んだ。うん、と顎に手を当て、

「おい朽木、これは……朽木？」

振り返つたが、そこにはもうルキアは居なかつた。

（馬鹿だ。私は、馬鹿だ）

土を蹴飛ばすよつた勢いで歩きながら、ルキアは唇をかみ締めた。

目に薄く、涙が溜まり始める。

海燕には、都がいる。強く、賢く、美しい妻がいる。

海燕がルキアにどれほど優しくしてくれたといひで、それは部下に対する愛情、それ以上でもそれ以下でもない。

（何を、期待していたのうう）

望めば裏切られる事は、とうに分かつてはいたはずだつた。

恋次しかり、白哉しかり、海燕しかり。皆、それぞれ大切に思うものがあり、自分は決して一番になれない。いや、一番になれなくともいい、ただほんの少しだけ、自分の居場所を与えてもらえた、それだけで満足できるはずなのに。

（馬鹿だ。私は、馬鹿なのだ）

認めて欲しいと。受け入れて欲しいと。そんな大それた願いを、なぜ持つてしまつたのだろう。自分にそんな価値など、そんな資格など……ないといつのに。

ドンツ！

「うつ！」

突然何かにぶつかり、足が止まつた。見上げると、

「ああん？ 何だガキ、ぼーっとしゃがつて」

人力車の車夫らしい、ねじり鉢巻をしたいかつた男が、こちらをじろりと睨み下ろしてきた。

「あ……。……済まぬ、前を見ていなかつた」

即座に謝るも、何か苛々した風の男は、先を行こうとするルキアをさえぎり、

「ちょっと待て、人様にぶつかっておいて、このままなんもせずに逃げるつもりかよ」

「逃げるなどと……今、謝つたではないか」

「だから、何だよ、その偉そうな口調はよ、ええ？　人に謝るつてんなら、相応の仕方つてもんがあるだろつよ」

「何だ、貴様つ……」

不意に腕を掴まれ、ルキアはぎくりとした。このままでは乱暴されるか、強請られるか、どっちにしてもろくな事にはならないだろう。

仮にも護廷十三隊に所属する身、この程度の男に遅れをとるわけにはいかない、と相手の手を振り払おうとした時、

「おい、てめえ」

ぬ、と脇から腕が伸びて、男の胸倉を掴んだ。そのまま、大柄な男をぐいと宙に持ち上げる。いきなり足が地面を離れて、車夫は悲鳴をあげた。

「う、うわっ！？」

「てめえ、俺の可愛い部下に何してくれてんだ、こら」「か……海燕殿！」

男を吊り上げた海燕は、ゆつとゆつと前後に揺さぶり、「天下の公道で強請りたかりたあ、いい度胸だ。話があんなら俺が聞くぜ。いいてえ事があるなら、とつとと言いやがれ。おら、何震えてんだ。さつきあいつに掴みかかってつた勢いはどこいった、ああ！？」

ドスのきいた声で脅しつけるものだから、車夫はすっかり縮み上がりつた。

「す、すんません、もうしません！」

「信用できねえなあ……。ほんつとーに反省したってんなら、てめえも誠意つてもんをだな」「か、海燕殿！」

呆気に取られていたルキアは、ぎょっとして海燕の腕にしがみつ

いた。このままでは、海燕のほうが強請りをしかねない。

「わ、私は大丈夫ですから、もう離してやつてください。」

「ああん？……ちつ、しようがねえな」

海燕は舌打ちして手を離した。男は地面に投げ出され、ひい、と情けない悲鳴をあげて脱兎の如く逃げた。その様子を見送った海燕は、フン、と鼻を鳴らした後、

「おい、朽木！」

「ひいつ！？」

がし、とルキアの頭を掴んだ。

「てめえ、勝手に出て行つたと思つたら、あんなのに絡まれてんじやねえよ。ひとつと打ちたおしゃ済んだらうが、何強請られそうになつてんだ」

「は、す、すみませ……いたたたたつ！」

ぎりぎり、と手に力が入つて、頭を締め上げられる。

「てめえはそりゃなくともボーッとしてんだ、氣をつけろー。」

吐き捨てるよつにいつて、ぶん、とルキアの頭を投げ出す海燕。ずきずき痛む頭を押さえ、すみません、と涙声で謝るルキアに、

「そらよ」

すい、と箱が突き出される。

「……え？ 海燕、殿？」

見上げると、海燕は、

「やるよ、これ」

簡潔にいつて、ルキアの手にそれを押し付けてくる。

「あ……」

押し付けられるまま受け取つたルキアは、でも、と反駁しよつとして、しかしきろつと睨みつけられて言葉を封じられる。

「あの……開けても、よろしくですか？」

「おお」

躊躇いがちに箱の蓋を持ち上げる。中には、つげ櫛が入つていた。艶やかな輝きを帶びた櫛には、椿の花が細やかに刻まれていて、美

しい。

「……これを、頂いてもよろしいのですか？」

「おう。俺の野暮用に無理やりつき合わせちまつたからな。わざやかなお礼つて奴だ。遠慮なく受け取れ」

言つて、海燕は「、と笑つた。先ほどまでの「」たゞたや、ルキアの無礼など全部忘れたかのように、何の屈託も無い、明るい笑みだつた。明るくて、優しくて、太陽のよつたな笑み。

「海燕殿……」

ルキアは俯いた。ぎゅ、と胸に箱を抱ぐと、つんと鼻が痛くなる。（この人は。この人は、眩しい）

眩しすぎて、真つ直ぐに見つめることさえ、叶わない。

腰を曲げて「おい、朽木？ 何だよ、さっきのがそんなに怖かつたのか？」心配そうに顔を覗き込んできた海燕に、ルキアは、「いえ。……ありがとうございます。大事にします」

そつと、笑い返してみせた。胸をつく愛しさと悲しさに、気づかないふりをして。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4933f/>

嘘ばかりうまくなる（BLEACH）

2011年8月15日03時24分発行